

国内研修活動報告書

八月二十二日から八月の二十七日まで法政大学一年生と二年生十四名＋高校まではそこに住んでいたという法政大学四年生計十五名で、島根県の北部に位置する隠岐という場所に行ってきた。隠岐は松江駅から隠岐海峡をフェリーで三時間かかる場所にあり、我々法政大学の学生は、隠岐の中で島前と呼ばれている場所に訪れた。島前は三つの島でできている。一つは西ノ島町、島前の三つの島の中で一番大きな面積をもっている。二つ目は海士町、後述するが、三日目に三つの島のどれかを班で分かれて観光をするのだが、私たちの班は海士町に訪れた。三つ目は知夫村だ。村とつくだけあり、人口は現在約六百人、面積は約十四平方キロメートルと人口も面積も小さい。このように島前では人口が少ないのが問題となっている。確かに日本の都道府県別人口ランキングを見ても、四十七位がお隣の鳥取県で、四十六位が島根県である。そのため島前高校では島留学制度などが行われている。島前高校ではヒトツナギ部というものが存在する。そこの部員たちも島留学からきた生徒もいた。そして我々は島の中学生、高校生との交流、島前について他のインターン生との議論などで、成長することを目標に島前に訪れた。最初は隠岐といわれても場所がわからず、日本地図で確認してみると、天気予報とかでみたことある！ というのが最初の印象だった。私は大学受験が日本史だったので、よく島流しに使われているということも知っていたが、島流しに使われていた島に良いイメージがわからず、最初は不安でいっぱいだった。一緒に行く先輩とも面識が無く、とにかく不安だらけで一日目を迎えた。まず島について感じたことが、昼間についたのにもかかわらず、人や車が全く無い。島前に来る前に三回島前について調べたり、島前で人とふれあう前に、自分を見つめなおす事前学習をしていたため、ある程度島前のことは知っていた。もちろん、島前の人口のことも知っていたが、私の出身が神奈川で、横浜などをよく知っていたため、この差には思わず驚いてしまった。他にも道路が海にもものすごく近かったり、信号がほとんど無かったりと、ついてほんの少ししか観察していなくても、驚くことはたくさんあった。それと同時にいい場所だなと思い、自然と島前に対する不安は消えていったようだ。島前合宿一日目は島前地域の伝統である、キンニャモニャ祭りというものに参加した。キンニャモニャ祭りとは町の人たちが二つずつしゃもじをもって、音楽に合わせてながら踊りを踊り、円になり行進していくという祭りである。我々法政大学生はこの祭りを知らなかったため、事前学習で踊り方などを学んだ。私が驚いたのがまずいろいろな年齢層がいたこと、そしておじいちゃん、おばあちゃんの踊りのキレがとてもよく、まるで別の踊りを踊っているかのように

見えた。いくら事前学習で踊っているとはいえ、あれに混じって踊るのは少し萎縮してしまうなど感じた。さらにキンニャモニャ祭りはある一定の踊りを一時間踊り続けるのにもかかわらず、島の人たちは疲れなど見せずに踊っていたように感じた。実際に私が踊ってみたら、十分ほどで踊りはほとんど間違えること無く踊ることができた。しかし、三十分踊るだけでもかなりの体力を使い、四十分後くらいになり、しゃもじを握っていた指の付け根の皮が剥がれてきた。キンニャモニャ祭りには、島の人以外にも、私たちと同じ大学生も参加していて、私たちはその大学生と合同チームという形で参加していたのだが、四十分ごろには、その大学生たちも疲れているように感じた。そこで改めて島の人たちのすごさを実感した。祭りが終わるとみんな疲れていたが、達成感にあふれていたのはいい思い出であった。キンニャモニャ祭りには賞がいくつかあり、我々大学生チームは参加賞のようなものを頂いた。その際、島の人たちはすごくあたたかく、たくさん祝ってくれたり、フレンドリーに声をかけてくれるおじさんもいて、東京とは違う人のあたたかさを感じた一日でもあった。キンニャモニャが終わるころにはあたりも暗くなり、花火が打ち上げられた。その花火は自分の見た中で一番近い距離から見る事ができた。宿に戻り明日の確認を済ました後、先輩方と話などをしながら一日目を終えた。ここで先輩たちとつながることもでき、島の雰囲気も味わうことができた。

二日目は島前高校の人たちとのふれあいがおこなわれた。この日は私も学ぶことがたくさんあった。そもそもしっかりとした機会と話すことがあまり無かったので、いい体験もできた。このワークショップに参加してくれた高校生はヒトツナギ部所属である。最初に自己紹介を兼ねたアイスブレイクが行われた。これはお互いの共通しているところを見つけるといふもの。私が二日目を振り返ったとき、よかったと思えるのが、アイスブレイクが成功し、いいスタートができたことである。その後ヒトツナギの活動を振り返り、上手くいったことと、そうでなかったものを考えた。大学生が質問し、高校生が答える形式で行われた。大学生三人、高校生三人で行われた。しかし私は一人の大学生に任せてしまい、他の二人があまり発言することができなかった。この他にも反省点はある、ヒトツナギで行ったホームステイや人物マップの製作で良かったこと、悪かったことを挙げる時間があったのだが、結果は悪いことばかりが出てきてしまった。いいことも絶対あるはずなのに大学生はそれを引き出すことができなかったのが私自身の技量の足りなさでもあり、班全体での反省点でもある。二日目の交流では、人のペースに飲まれてしまい発言があまりできなかったこと。答えを掘り出してこられなかったこと。時間内に話が終わらなかったことなど反省点はいろいろあった。つかみまでは想像通りだったのだが、改めて交流の難しさを感じた。

三日目は班ごとに観光をした。先ほども述べたように、私の班は海士町に訪れた。初日から思っていたのだが、どこの島へ行ってもすれちがった人が挨拶をしてくれる。海士町でももちろんそうだった。海士町に着き海岸、後醍醐天皇の墓、隠岐神社などに訪れた。一番印象的なのが長靴カフェという京都造形大学が運営しているカフェであり学生が起業を

するというところに興味をもった。夜は海鮮のバーベキューで島前を満喫できた一日だった。四日目は台風で外出ができなかったため、私はジョハリの窓を作成した。これは中学生交流でも使うものでもある。みんなに第一印象を言ってもらい、みんなには見えていても自分では分かっていないもの、その逆もあり自分を見つめなおすことができ、個人的には外出はしていないのに、すごく自分のためになった一日であった。

五日目はこの合宿で一番のハードスケジュールであり、自分のこれからの課題も少し見える日でもあった。午前中は中学生との交流を行った。大学生一人に対し、中学生は一人または二人で行われた。まず行ったのがライフストーリーチャート作成。これは今までの人生を良いか悪いかでグラフにして表すものである。ジョハリの窓もそうだが、この機会が無ければこんなに自分を見つめなおせることは無かったであろう。そして中学生にもジョハリの窓をつくってもらい、大学生はその補助を行った。中学生はすごく謙虚だったのでなかなか自分では作成が難しそうであった。今回の中学生交流では、高校生交流と違い、会話が盛り上がりがあった。しかしジョハリの窓の案を出すのにこずり、時間内に終わらせることができなかった。掘り出すことはできたので高校生交流のときよりは成長したものの、時間をどれだけ意識できるかが今後の課題となりそうだ。午後はインターン生と議論を行った。内容は島前でやりたいこと、島前で感じたことなどあったが、最後の内容である自分が地域で何ができるかという議論で私は東大のインターン生に圧倒されてしまった。

この議論での反省点はあまり意見が思いつかなかったことである。彼らインターン生の専門分野はまちづくりでは無いのにも関わらず意見を次々と出している。自分には臨機応変に対応しなければならぬと感じさせられた。全体としても、法政側は意見が少なかつたように感じた。五日目は大変であったが、とてもやりがいを感じた。特に中学生交流では中学生が心を開いてくれたときの嬉しさはこの合宿一かもしれない。

この島前合宿を通して、自分はまず大学生とはとても小さな存在だと感じた。インターン生などたくさんの学生が訪れてもせいぜい島の人々の意識や気持ちを変える程度。しかしその小さなことやお手伝い程度でもいいからやってみよう。少しでも役に立ちたいと思うようになっていた。ほかにも人とつながったり、海などの自然を楽しんだり、自分を見つめなおせたり、とても充実した合宿であった。このまま何もしなければ以前となにもかわらないので、この合宿で学んだことを活かし、少しずつでも自分のできることをやろうと思った。

以上